

日本語力をより反映するCan-do-statement項目の検討

— 話す領域を中心に —

関崎 博紀 酒井 たか子

要 旨

本稿では、日本語学習者の日本語力をよりの確に反映するCan-do statementの記述の仕方について考察する。まず、「話す」クラスのためのCan-do statementを作成し、2010年4月のプレースメントテストと同時に実施した。Can-do statement調査の結果について、プレースメントテストの結果との相関を分析した。その結果、「話題への対応の広さ」「事前準備の有無」「話す活動の形態（説明、発表、議論）」などの点において、中程度の相関がある項目からほとんど相関のない項目まで幅が見られた。それらの項目に含まれる文言を分析したところ、日本語力をより反映するCan-do statementを作成するためには、「できることとできないことの限界の認識がよく反映できる記述」、「聞く能力も含まれている記述」、「1人で話すのに適切な分量」、「記述から読み手が想定する活動が一致する記述」に配慮する必要があることが示唆された。

【キーワード】 Can-do-statement、プレースメントテスト、口頭能力

Towards Designing Oral Can-do Statements which Better Reflect Learner Proficiency

SEKIZAKI Hironori, SAKAI Takako

【Abstract】 This study examines methods for formulating Can-do-statements in a way which will more accurately reflect Japanese learners' oral abilities. First, an attempt at developing Can-do-statements is discussed. Following a pilot test, data were collected from 106 learners who had completed a beginner course. This study reveals that items which contain keywords which relate to abstract topics concerning world events, or include qualifiers such as "with preparation" and "in discussion", have a relatively high correlation to results of the in-house Placement Test. It is implicated that in order to develop can-do-statements which more accurately reflect learners' oral abilities, it is necessary to give consideration to including statements which 1) can reflect learners' understandings concerning the limitations of what they can do, 2) contain the activity of listening, 3) indicate the amount of speaking to be done, and 4) facilitate visualization of the same activity across multiple participants.

【Keywords】 Can-do statement, placement test, oral ability

1. はじめに

筑波大学留学生センターで開講している日本語の補講コース（以下、補講とする）は、2010年4月より、J100からJ900という9レベルに分かれた。J100からJ400までは初級の総合日本語コースであり、J500からJ900までは中・上級の技能別クラス（文法、話す、聞く、読む、書く、漢字）になっている。

この補講コースには、2010年9月現在、約600名の留学生が申し込みをしている¹。今後、留学生の受け入れ拡大に伴い、更なる人数の増加が見込まれる。この多人数を、適切なレベルに配置するためのよりよい方法を見出すことは、喫緊の課題となっている。現在、新規に日本語を受講する学生約250名から300名を対象にWEBによるコンピュータテスト（筑波プレースメントテスト）および筆記テストを行い、クラス配置を行っている。会話クラスのためには、本来ならば、実際に面談して話す能力を測定することが望ましい。しかし、数日間のうちにこれだけの人数に面談し結果まで出すことは難しく、より簡便に実施・判定することが可能な、経済性に優れた会話力を測る方法が求められている。

本稿では、その一つの可能性として、Can-do statementに焦点を当てる。Can-do statementとは、ある現実の行動ができるかできないかを学習者が自己評定によって示す記述のことである。「日本語で自分の名前が言える」のような記述であれば、日本語学習経験の全くない学習者を除いて、「できる」という評定が予想される。その場合、この質問は、多くの日本語学習者の日本語力の差をあまり反映しないものとなる。では、学習者の日本語力をよりよく反映し、「話す」コースのプレースメントに用いるCan-do statementは、どのように記述すべきであろうか。そのために、調査で用いた設問の回答が、プレースメントテストによって測定された受講者の日本語力とどの程度の相関が見られるのかについて分析する。そして、より相関が高い項目はどのような記述を含んでいるのか、それらはどのような特性を持っているのかを明らかにする。

2. 本研究の位置づけ

試験において利用されるCan-do-statementは、The ALTE 'Can Do' statements、JLRT Candoレポート、TOEIC Research Report、などに見られる。

The ALTE 'Can Do' statementsは、ALTE（ヨーロッパ言語テスト協会：The Association of Language Testers in Europe）によるプロジェクトの中で開発されたものである。ALTEは、ヨーロッパの言語テストを比較するための共通枠組みとして、入門レベルである「Breakthrough」から「C2」（ALTEレベル5）までの6段階からなる「ALTE Framework」を作成した。そして、「～できる」というCan-do-statementによって各レベルの「言語使用者が典型的にどのような言語活動ができるのかを記述」（杉本 2006）している。これによって、言語使用者は実際に何ができるのかということに関連させて、各レベルがどのよ

うな言語能力を想定しているのかを容易に理解することができる、とされている。

JLRT Candoレポート²は、日本貿易振興機構が実施した聴読解テストであるJLRTの評価が、実際にどのような日本語運用能力を反映したものを明らかにする試みである。2003年には、同2月実施のJLRTプリテストの受験者368名を対象に、話し言葉（「簡単な自己紹介ができる」他）、書き言葉（「自分の住所・所属が書ける」他）、両者の複合で構成される41項目のアンケート調査（5段階評定）を実施し、J4からJ1の各レベルと判定された受験者が実際の言語活動として何ができるのかを示している。アンケートの各項目は、「～ができる」というCan-do statement形式となっている。

TOEIC Research Report³は、テストユーザーがより実地的な方法で、TOEICスコアを解釈できるようなチェックリストを開発することを目的とした研究の報告である。TOEICには、特定のスコア域に属する受験者が、職場で英語を使用してどのような業務が遂行できるかが具体的に示されないという問題を抱えていた。そこで、2001年から2002年にかけて、受験者に対して、65のタスク項目（Can-do statements）からなる5段階評定のアンケートを実施し、特定のTOEICスコアを持つ人が、業務という枠組みの中で、英語を使用して、どのような仕事が、どの程度遂行できるかを示すチェックリストが作成された。

また、日本語能力試験の受験者に対してCan-do statement調査を実施し、受験者が具体的にどのようなことができるのかを明らかにする試みに、島田他（2006）がある。

以上にまとめたCan-do statementは、試験において特定のレベルと判定された人が、実際にどのような言語活動ができるのかを示すことを目的として開発されている。これに対して、本研究が目指すのは、Can-do statement自体を日本語力判断の基準として利用しようとする試みであり、そのために相応しい項目の特性を検討しようとするものである。

3. 方法

本節では、まずCan-do statement（以下、CDS）を用いたアンケート調査について述べる。次に、2010年4月に実施した筑波大学留学生センターのプレースメントテストと本研究のCDSとの相関をとるのに用いた点数について述べる。最後に、両者を用いた分析の方法を述べる。

3.1 アンケート調査

CDSは、筑波「話す」スタンダード試作版に基づいて記述した。この筑波「話す」スタンダード試作版は、上級のJ900から中級前期であるJ500のそれぞれの「話す」クラスで指導する技能を、レベルごとに段階的に記述したものである。「話す」コースを担当する教員⁴同士での話し合いや、先行研究（北村・的場 1993、下瀬川 1996、東京外国語大学留学生日本語教育センター 2009）などから、口頭能力を構成すると考えられる要素を取り出

し、試験的に作成した。その要素の一例を挙げる。

- ・話題への対応の広さ
- ・事前の準備の要/不要
- ・談話構成能力

それぞれのレベルの記述は、話題については、500レベル開始時には「日常的・身近な話題」に対応できるものとし、そこから自国の文化や制度、ローカルな話題、グローバルな話題、非日常的な話題というように、レベルが上がるにしたがって身近でなくなるようにした。準備については、準備が不可欠な段階から、準備なしで即興的な話し合いに対応できる段階へ、談話構成能力については、発話を連続させて談話を構成できない段階から、4～5人の議論において自分の望む結果に導くことができる、という段階へと設定した。CDSの記述は、各レベルの口頭能力構成要素の記述を組み合わせで行った。例えば、800レベルと想定したCDSの1つは、話題として「グローバルな話題」、事前準備が「ある」、談話構成能力として「4～5人での議論」を組み合わせ、以下のように記述した。

例) 世界的に話題になっている問題 (人口問題や環境問題など) について、準備をすれば4～5人で議論できる。

このようにして52項目を作成し、ランダムに並べ替えたうえで、それぞれ4段階 (1: 全然できない～4: 問題なくできる) で評定するようにした。4段階としたのには、いくつか理由がある。5段階や7段階のように奇数とした場合、中央の値に回答が集中する事態が想定された。これを偶数とすることで、「できる」寄りなのか「できない」寄りなのかという判断が、評定者にも調査者にも明確になる。6段階としなかったのは、両端の値 (1と6) がマークされにくく、結果的に4段階評定と同じになるのではないかと想定されたことと、2と3の差、4と5の差の判断が評定者にとって難しいのではないかと考えたことによる。

回答がなおざりになされたものではない、信ぴょう性の高いものであることを確かめるために、常識的に「できる」寄りの回答が極めてなされにくい設問 (例: 「全ての方言も含めて、日本語を問題なく話せる」) を3つ加えた。それらの2つ以上に「できる」寄りの回答があるものはデータから除外することにした。

調査は、2010年4月7日から9日にかけて、留学生センターのプレースメントテストと同時期に実施した。日本語版、英語版、中国語版を用意し⁵、どれに回答するかは学習者を選択させた。

3.2 プレースメントテスト

筑波日本語テスト集 (TTBJ) には、筑波大学留学生センターで開発した初級から上級までの日本語クラス分けのためのプレースメントテストが格納されており、WEB上でコンピュータテストが受験できるようになっている。各学期のプレースメントテストは、このWEBによるコンピュータテストと、文完成の筆記テストから構成される。所要時間はコンピュータテストが約80分、記述式テストが25分で約2時間のテストとなっている。

初級対象と中上級対象で異なるが、本稿の対象者は中上級向けのテストを受験している。問題の構成、問題数は表1に示す。コンピュータテストによる選択式テストは、文字による文法テスト、音声による文法テスト、文字による語彙テスト、音声による語彙テスト、漢字読み書き、SPOT⁶、漢字SPOT⁷テストにより構成される⁸。これらを各技能別の授業内容に合わせて重みづけをする。本稿で扱う会話クラスは、音の関わる問題の割合を多くした得点を利用してレベル判断を行った。

表1 筑波プレースメントテスト (TTBJ) 中上級対象向けテストの構成と重みづけ

形式	内容	提示方法	中上級対象	音を重視	文字を重視	文法重視	漢字重視
			問題数	聴解クラス・ 会話クラス	読解クラス・ 作文クラス	文法クラス	漢字クラス
コンピュータ による 選択式 テスト	SPOT	音声+文字	120問	25%	20%	20%	
	語彙	音声+文字/音声	45問	25%	10%	10%	
	文法	音声	30問	10%	5%	10%	
	文法	文字	90問	10%	20%	25%	30%
	漢字 KSPOT	音声+文字	50問	5%	10%	5%	40%
	漢字 読み書き	文字	100問	5%	10%	5%	30%
記述式	文完成	文字	60問	20%	25%	25%	
	合計			100%	100%	100%	100%

3.3 分析方法

調査の結果と、筑波日本語テスト集 (TTBJ) の中上級対象向けプレースメントテスト (以下、PT) の結果との相関を測る。相関をとるのに用いるのは、「話す」「聞く」コースのレベル分け用に重み付けを施した点数である (表1の太枠の部分)。個別の内容やレベルごとではなくこの点数を用いるのは、本研究が、調査で用いた項目が受講者全体の日本語力をどの程度反映しているか把握することを目的としているからである。この点数との相関が高い項目、低い項目のそれぞれについて、どのようなキーワードが含まれているかという点から、設問を検討していく。分析は、話題への対応の広さや事前準備の有無など、

観点ごとに行う。なお、相関の強さについては、0.0～0.2を「ほとんど相関がない」、0.2～0.4を「弱い相関がある」、0.4～0.7を「中程度の相関がある」、0.7～1.0を「強い相関がある」と表現する。

4. 結果

欠損値のあるデータおよび信憑性が疑われるデータ25件を除いた結果、106名分の回答がデータとなった。回答言語は、日本語が40名、英語が26名、中国語が40名であり、3言語のバージョンを用意することの必要性が確認された。相関係数は、最大値は0.51（「自分の国の若者が抱える社会問題について、準備すれば原因や背景、解決策を3分程度で話すことができる。」）、最小値は0.06（「フォーマルな議論の場で質問に答えるときに、始めと終わりに何と言うか分かる。」）であった。以下、「話題への対応の広さ」「事前準備の有無」「話す活動の形態（説明、発表、議論）」「話す際に用いる道具等（絵、原稿、レジュメetc）」「聞き手への配慮」「社会言語的能力」のそれぞれの観点から、結果を見ていく。

なお、結果を示す際、詳細な結果の一覧は、本稿末尾の表2～7にまとめ、本文中ではその要点を述べる。多くのCDSは、一つの記述に複数の観点を含んでいるため、（例えば、「世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。」は、話題、事前準備の有無、話す活動の形態からの記述になっている）、同一の項目が複数回にわたって表に示されている。また、結果を示す際には、適宜、散布図も併用する。図中では、CDSについて、尺度をグラフ左側の縦軸に示し、回答の結果を◆の記号で表す。また、PTの結果については、尺度をグラフ右側の縦軸に示し、結果を+の記号で表す。

4.1 話題への対応の広さについて

PTとの中程度の相関があった項目には、「自分の国の若者が抱える社会問題」「世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題）」「自分の国でよく話題になる社会問題」「日本の学校制度や文化」など、身近でない話題が上がった。例えば、「日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。」(0.463)の回答結果とPT結果との関係(図1)を見ると、CDSで「できる」寄りの回答をしている者にはPT高得点者が多く、逆に、「できない」寄りの回答をしている者には、PT低得点者が多いことが分かる。一方、ほとんど相関がなかった項目は、「好きなスポーツやよく知っているゲーム」「自分の専門」「友人の紹介」「専門のゼミ」など、比較的身近な話題であった。これは、図2からも分かるように、「できる」寄りの回答をする者にPT高得点者も低得点者も多く含まれていたことが影響したと考えられる。（「話題への対応の広さ」についての結果の詳細は、表2参照。）

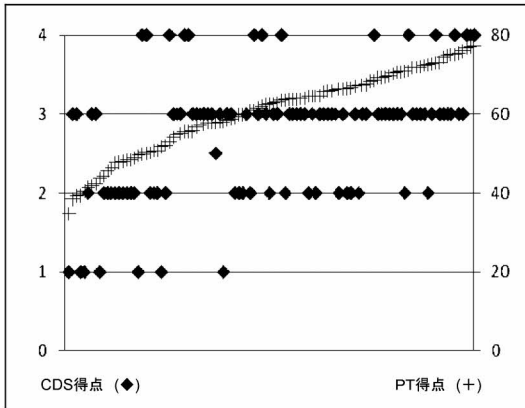


図1 「日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。」のCDS得点とPT得点との関係

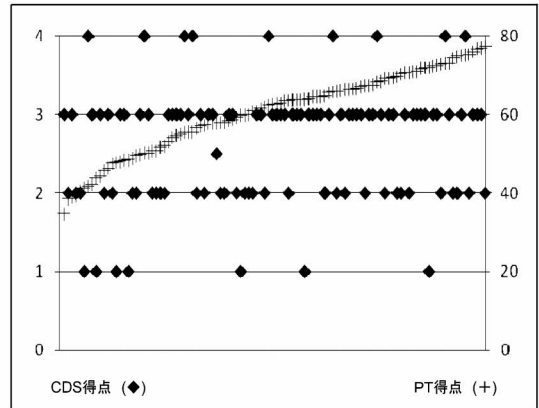


図2 「自分の専門の内容について、専門外の人4～5人の前で説明できる。」のCDS得点とPT得点との関係

4.2 事前準備の有無について

「準備をすれば」と明記されているものは、中程度の相関があった（「自分の国の若者が抱える社会問題について、準備すれば原因や背景、解決策を3分程度で話すことができる」(0.508)、「世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。」(0.479)、「日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。」(0.463)）。PT高得点者は語彙量、文法量があるために様々な話題に対応できるが、PT低得点者は準備をしても対応しきれない、ということを反映したものと考えられる。次頁の図3を見ると、「できる」寄りの回答をしている者にはPT高得点者から中得点者が多く、「できない」寄りの回答をしている者にはPT低得点者が多いことが分かる。一方で、「準備をしないで/しなくても」と書かれている項目は、相関が比較的弱かった（「日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、準備をしないで4～5人で議論ができる。」(0.353)、「自分の国の社会制度（教育制度、政治制度）について、準備をしなくても説明できる。」(0.144) など）。これは、次頁の図4からも分かるように、「できない」寄りの回答にPT高得点者から低得点者が含まれ、「できる」寄りの回答が減ることに起因する。（「事前準備の有無」についての結果の詳細は、表3参照。）

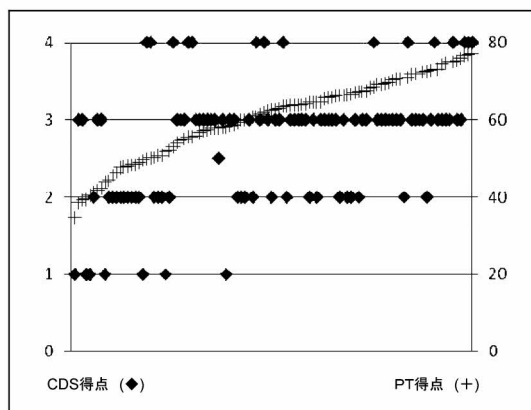


図3 「日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。」のCDS得点とPT得点との関係

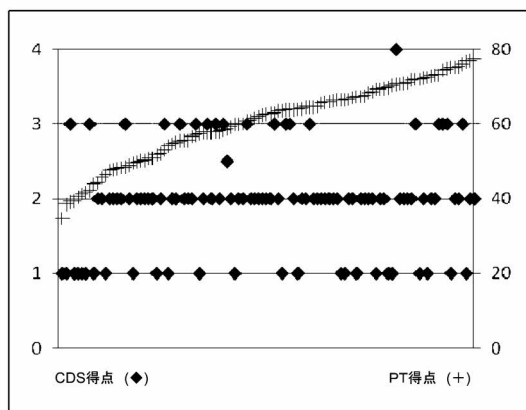


図4 「自分の国の社会制度（教育制度、政治制度）について、準備をしなくても説明できる。」のCDS得点とPT得点との関係

4.3 話す活動の形態について

話す形態には、「説明」「発表」「議論」などがある。このうち、「議論」はPT結果と中程度の相関があるものが多かった（例えば、「世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。」(0.479)、「日常的な専門的ではない内容について、15分ぐらい議論ができる。」(0.431) など）。これらは、次頁の図5を見ると分かるように、「できる」寄りの回答をした者にはPT高得点者から中得点者が多く、「できない」寄りの回答をした者には、PT中得点者から低得点者が多い傾向があるためである。一方で、「説明」「発表」という形態は、PT結果との相関が弱いものやほとんどないものが多かった（例えば、「自分の専門の内容について、専門外の人にも分かるように説明できる。」(0.356)、「原稿を見ながら自分の家族などの身近な話題について3分ぐらいの発表ができる。」(0.255) など）。「説明」「発表」する際の話題が身近であれば、「できる」寄りの回答をする者の中にPT高得点者から低得点者まで多く含まれてしまい（図6参照）、抽象的な場合には「できない」寄りの回答の中にPT高得点者も多く含まれてしまった（図7参照）ことが原因と考えられる（「話す活動の形態」についての結果の詳細は、表4参照）。

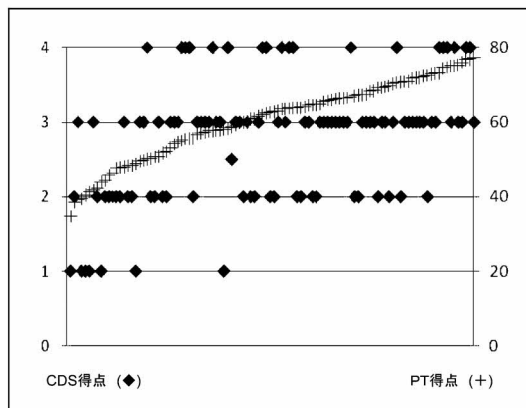


図5 「世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。」のCDS得点とPT得点との関係

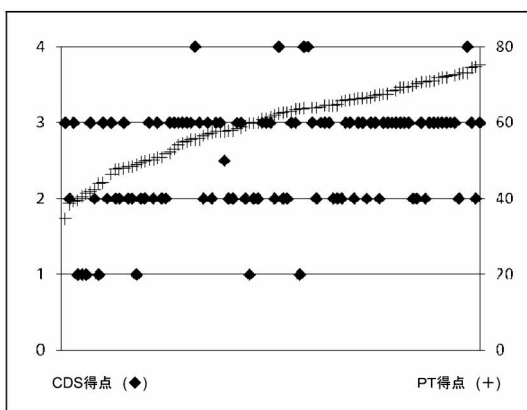


図6 「自分の専門の内容について、専門外の人にも分かるように説明できる。」のCDS得点とPT得点との関係

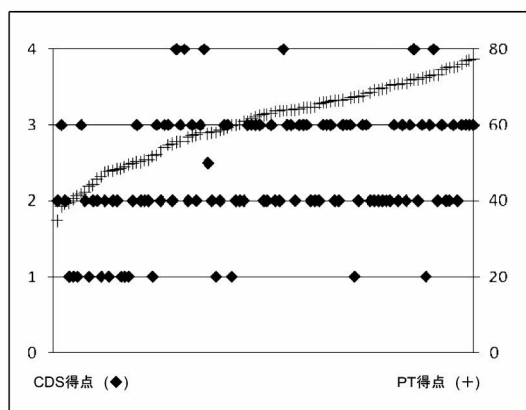


図7 「日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、自国と比較しながら4～5人の前で説明できる。」のCDS得点とPT得点との関係

4.4 話す際に用いる道具等について

話す際に用いる道具等には、絵、写真、ジェスチャー、レジユメ、グラフや図、原稿、メモ、などがある。いずれの設問も、PT結果との相関は弱いか、ほとんど見られなかった。レジユメを使った発表は、「できる」寄りの回答をする者にPT低得点者も多かった（次頁の図8参照）。また、レジユメという手段は「説明」「発表」という形態と結びついている。4.3で述べたように、これらの活動形態はPT得点との相関が比較的弱い。このために、レジユメを使った活動は、PT得点との相関が弱くなったと考えられる。原稿を用いた発表

は、PT得点にかかわらず全般的に「できる」寄りの回答となっていた。「絵や写真」という文言を含んだ2項目は、比較的相関が強かった(「絵や写真やジェスチャーを使って、日常生活について話せる。」(0.400)、「絵や写真を見せながら、自分の国の生活に欠かせないものについてそれを知らない人にその事物がどんなものかその用途と機能を(3分程度)で紹介できる。」(0.353)) のは、この項目については、他の手段が持つような性格が薄く、PT高得点者は「できる」寄りの回答をし、PT低得点者は「できない」寄りの回答をしたことに起因すると考えられる(「話す際に用いる道具等」についての結果の詳細は、表5参照)。

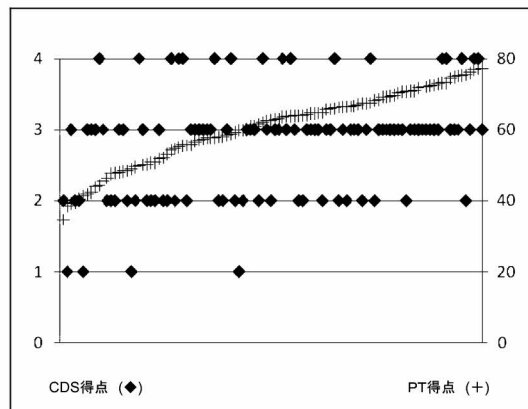


図8 「発表の時に、レジュメと発表用のメモを見ながら話せる。」のCDS得点とPT得点との関係

4.5 聞き手への配慮について

聞き手への配慮とは、相手が分からなそうにしていることを見る余裕があるかどうか、その時に別の説明や言い換えができるか否かを問うたものである。全体的に、今回のPT結果との相関は弱かった。しかし、散布図を確認すると、項目の文言の違いによって回答に若干の違いが見られた。次頁の図9は、「話している時、相手が分からなそうにしていたら、易しく説明したり言葉を言い換えたりできる。」というCDSの回答結果を、図10は、「説明や質問の時、相手に分かりやすい言い方を選びながら話せる。」というCDSの回答結果をそれぞれ示している。どちらも同じく聞き手の理解を助ける表現方法についての記述であるが、前者は「易しく説明したり言葉を言い換えたり」という文言を、後者は「相手に分かりやすい言い方」という文言を含んでいる。前者には、「4」の回答が比較的多く、そこにはPT高得点者も低得点者も含まれている。一方で後者には、「2」の回答が多くなり、そこにはPT中得点者から低得点者が含まれている。「易しい」の基準は、話し手自身で決めることができるが、相手に「分かりやすいかどうか」というのは、話し手のみでは

決められず、相手の様子に注意する必要がある。そこに難しさを感じた者が、PT中得点者から低得点者に多かったことの表れと考えられる（「聞き手への配慮」についての結果の詳細は、表6参照）。

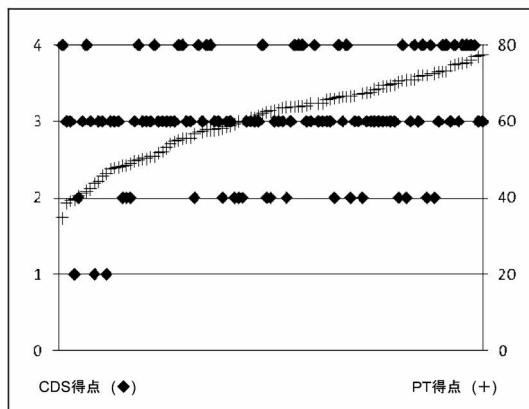


図9 「話している時、相手が分からなそうにしていたら、易しく説明したり言葉を使い換えたりできる。」のCDS得点とPT得点との関係

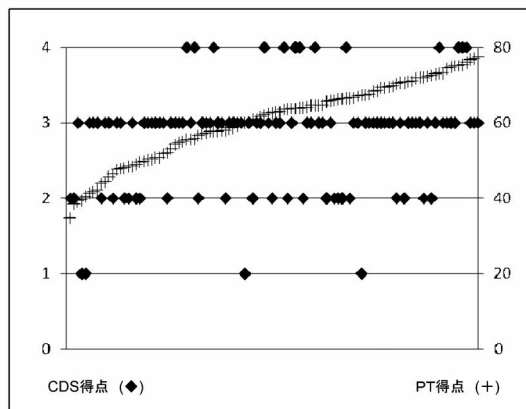


図10 「説明や質問の時、相手に分かりやすい言い方を選びながら話せる。」のCDS得点とPT得点との関係

4.6 社会言語的能力について

ここでは、敬語の使用や、普通体/丁寧体の使い分けなどを問うた。全体的に、PT結果との相関は弱い、ほとんどなかった（相関係数が最も高かったのが、「先生と話す時、「です・ます」と普通体を間違えないで話せる。」(0.361)、最も低かったのが「フォーマルな議論の場で質問に答えるときに、始めと終わりに何というかわかる。」(0.064)であった)。これは、「3」「2」が多く選択され、そこにPT高得点者から低得点者まで含まれていたことに起因する。PT高得点者であっても「4」が少ないことから、日本語力が高い人ほど敬語や普通体/丁寧体の使い分けが難しいと感じていることが示唆される。PT低得点者に「1」が選択されることが少なかったのは、「です、ます」程度の基本的な使い分けはできると想定したためだと考えられる（次頁の図11、図12参照）（「社会言語学的能力」についての結果の詳細は、表7参照）。

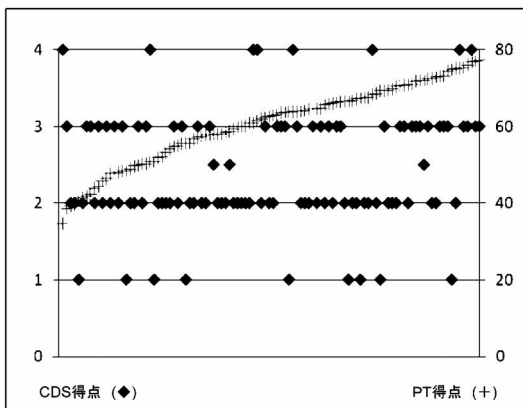
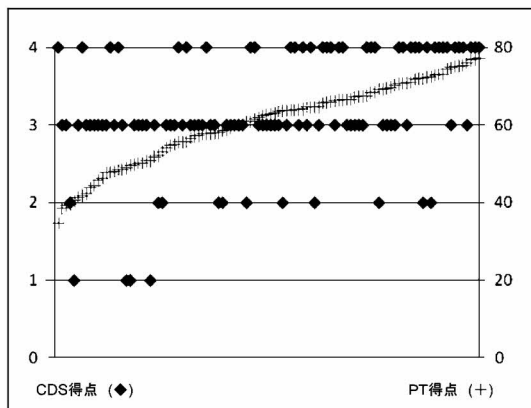


図11 「先生と話すと、「です・ます」と普通体を間違えないで話せる。」のCDS得点とPT得点との関係

図12 「専門の先生と話している時、敬語が使える。」のCDS得点とPT得点との関係

5. 考察

本節では、上述の結果を踏まえ、学習者の日本語力をよりよく反映するCDSの項目の特性を考察する。ここでは、次の4つの可能性を指摘したい。「自信と限界の認識がよく反映できる記述」、「聞く能力が含まれている記述」、「1人で話すのに適切な分量」、「記述から想定される活動が一致する記述」の4つである。

まず、「できることとできないことの限界の認識がよく反映できる記述」について述べる。4節で見たように、身近でない話題を用いた言語活動が、PTとの相関が比較的高かった。つまり、身近な話題であれば、「できる」寄りの回答の中にはPT低得点者も高得点者も含まれるのに対して、身近でない話題では、「できる」寄りの回答の中にPT高得点者が多く、PT低得点者が少なかった。これは、世界的な話題や社会問題を説明するには、相応の文法力、語彙力が求められることを学習者自身も認識しており、その認識が表れたためだと考えられる。また、「準備をすれば」という文言を含んだものも、PTとの相関が比較的高かった。PT高得点者は語彙量、文法量があるために様々な話題に対応できるが、PT低得点者は、それがいないために準備をしても対応しきれない、ということを反映したものと考えられる。一方で、「準備をしないで/しなくても」と書かれている項目は、比較的相関が低かった。これは、「できる」寄りの回答の中に、PT高得点者が減ることに起因する。準備をしなければ即座の対応は難しいと考えられたことがうかがえる。これらのことから、学習者自身の、どのような条件であれば何ができる/できない、という限界についての認識をよく反映する記述が必要であると示唆される。

次に、「聞く能力も含まれている記述」について述べる。言語活動として、議論をするという記述の方が、説明や発表をするという記述よりもPTとの相関が高い項目が多かつ

た。議論には、相手の意見や質問を的確に理解するという言語活動が多く含まれる。理解の際に必要な語彙力、文法力も高く、聴解力も高い学習者は、議論にも対応できると回答したと考えられる。また、この結果には、「1人で話すのに適切な分量」も関係している可能性がある。説明や発表の場合、1人で話し続けなければならないのに対して、4～5人での議論の場合、1人である程度話した後は、他の参加者が話すことになる。身近ではない話題で話す場合には、前者の負担が相対的に大きくなるのが、結果に表れたとも考えられる。

最後に、「記述から読み手が想定する活動が一致する記述」について述べる。敬語の使用や、普通体/丁寧体の使い分けに関する項目に対しては、「3」「2」が圧倒的に多く選択され、そこにはPT高得点者から低得点者まで含まれていた。これは、PT高得点者ほど敬語や普通体/丁寧体の使い分けに関して知識があるために、難しいと感じて「4」（「問題なくできる」）を選択せず、PT低得点者は、基本的な使い分けのみを想定していたために「1」（「全然できない」）を選択しなかったためだと考えられる。つまり、「「です・ます」と普通体」、「敬語」という文言から想定される言語活動は、一様ではなかった可能性がある。1つの記述から想定される言語活動を一様にする方策として、簡単なビデオや会話の音声を視聴させ、それができるか否かを問う、という方式も考えられる。

6. まとめ

以上、本稿では、CDSのアンケート調査の結果と受講者全体のPT結果との相関を分析し、より日本語力を反映する文言が備えるべき条件を考察した。今回のCDSは、話題や事前準備の有無という観点ごとに条件を統制してはいなかったが、どのような要因、文言が最も回答に影響したのかを明らかにするためには、今後、条件を統制した形での調査が必要になる。また、今回は、中上級の学習者全体の結果を分析したが、今後は、レベルごとにも分析を行いたい。つまり、J500とJ600以上で回答に違いが出るものは何か、J800とJ900の回答に違いを出せるような記述は何か、という分析である。このような分析を通して、より日本語力を細かく反映するCDSを模索していきたい。

謝辞

本稿の執筆に先立ち、日本語教育方法研究会（2010年9月、金城学院大学）において多くのご指導、ご指摘をいただきました。記して感謝申し上げます。

注

- 1 筑波大学の全留学生数は、2010年9月現在で約1700名になる。
- 2 www.studyjapan.go.jp/jp/inj/jetro_02.pdf（2010年9月27日）。

- 3 www.toeic.or.jp/toeic/data/pdf/TaeIto_J.pdf (2010年9月27日)。
- 4 当センターの非常勤講師(当時)である小林真紀子氏、杉浦千里氏、田中友愛氏、ボイクマン総子氏(50音順)と第一筆者である。
- 5 各項目の英語訳は、当センターの准教授であるブッシュネル・ケード氏に、中国語訳は、人文社会科学研究科国際日本研究専攻の大学院生である楊元氏に依頼した。
- 6 詳細は、小林他(1996)を参照されたい。
- 7 詳細は、加納(2009)を参照されたい。
- 8 各問題の例は、酒井(2007)を参照されたい。

参考文献

- 加納千恵子(2009)「漢字語彙の音声処理能力を探る」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号：1-18
- 北村よう・的場主真(1993)「日本語会話能力の測定」『東海大学紀要. 留学生教育センター』13：43-66
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史(1996)「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6号：201-218
- 酒井たか子(2007)「中規模テストとしてのプレースメントテスト再考—筑波プレースメントテストの開発と課題—」『大学における日本語教育の構築と展開』、ひつじ書房：263-274
- 島田めぐみ・三枝令子・野口裕之(2006)「日本語Can-do-statementを利用した言語行動記述の試み—日本語能力試験受験者を対象として—」『世界の日本語教育』16：75-88
- 下瀬川慧子(1996)「初級学習者の口頭表現力の測定について」『東海大学紀要. 留学生教育センター』16：1-16
- 杉本明子(2006)「ヨーロッパの言語テストの共通枠組み-ALTE Framework-」国立国語研究所(編)『世界の言語テスト』、くろしお出版：25-39
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(2009)『JLC日本語教育スタンダード2009改訂版』

[資料] 観点ごとに見たCDSの回答の結果

表2 「話題への対応の広さ」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
自分の国の若者が抱える社会問題について、準備すれば原因や背景、解決策を3分程度で話すことができる。	0.508	2.62	0.836
世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。	0.479	2.77	0.820
日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。	0.463	2.74	0.785
自分の国でよく話題になる社会問題について、4～5人の前で説明できる。	0.454	2.48	0.803
日常的な専門的ではない内容について、15分ぐらい議論ができる。	0.431	2.57	0.769
世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題）についての発表を聞いて、もっと知りたいについて詳しく質問ができる。	0.428	2.63	0.772
絵や写真やジェスチャーを使って、日常生活について話せる。	0.400	3.02	0.744
世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）を1つか2つ知っている。	0.399	2.69	0.809
ゼミで他人の発表内容について議論ができる。	0.381	2.53	0.771
自分の専門の内容について、専門外の人にも分かるように説明できる。	0.356	2.60	0.714
絵や写真を見せながら、自分の国の生活に欠かせないものについてそれを知らない人にその事物がどんなものかその用途と機能を（3分程度）で紹介できる。	0.353	2.81	0.751
日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、準備をしないで4～5人で議論ができる。	0.353	1.99	0.655
日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、自国と比較しながら4～5人の前で説明できる。	0.347	2.36	0.782
外国の文化紹介を聞いて、分からなかった内容について質問ができる。	0.333	2.92	0.727
日本人の友達と話す時、研究などの専門的话题でなければ話せる。	0.329	3.02	0.806
世界的に話題になっている（環境問題など）問題について、準備をしないで4～5人で議論できる。	0.316	2.20	0.706
「そして」「だから」などを使って、自分が日本で体験したこと（驚いたこと、うれしかったこと、悲しかったこと）など身近な話題について話せる。	0.307	3.17	0.737
日常生活に必要な日本語が話せる。	0.307	3.17	0.640
自分が好きなスポーツやゲーム、場所などについて、お勧めするポイントを4～5人の前で説明できる。	0.303	2.94	0.771
専門のゼミで他人の発表について質問するとき、何と言うか分かる。	0.302	2.41	0.799
日本と自国の文化的な違いについて例を述べ、それについてクラスメートにメモを見て3分程度で発表できる。	0.283	2.84	0.782
自分の生まれた町について地理や人口、町の特徴についてメモを見て3分ぐらい話すことができる。	0.270	2.89	0.747
自分の国にある観光地を、準備すれば5分ぐらい紹介できる。	0.265	3.12	0.755
日本の学校制度や文化について、準備した簡単なメモを見ながら5分ぐらい発表できる。	0.258	2.59	0.765
原稿を見ながら自分の家族などの身近な話題について3分ぐらいの発表ができる。	0.255	3.25	0.757
日常生活で分からないことがあったら質問ができる。	0.253	3.39	0.655
自分の国の社会的な問題を、1つ2つ知っている。	0.214	3.16	0.770

Can-do statement	相関係数	平均	SD
好きなスポーツやよく知っているゲームなど身近な話題であれば、他の人からの質問が分かる。	0.169	3.50	0.590
自分の専門の内容について、専門外の人4～5人の前で説明できる。	0.159	2.63	0.734
フォーマルな日本語で、先生にあなたの友人の紹介（学年、専門、あなたとの関係など）がきちんとしてできる。	0.159	2.67	0.839
自分の国の社会制度（教育制度、政治制度）について、準備をしなくても説明できる。	0.144	1.97	0.677
専門のゼミで発表を始めると終わる時に、日本語で何と言うか分かる。	0.124	2.42	0.932

表3 「事前準備の有無」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
自分の国の若者が抱える社会問題について、準備すれば原因や背景、解決策を3分程度で話すことができる。	0.508	2.62	0.836
世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。	0.479	2.77	0.820
日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。	0.463	2.74	0.785
日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、準備をしないで4～5人で議論ができる。	0.353	1.99	0.655
発表の時に、レジュメと発表用のメモを見ながら話せる。	0.344	2.80	0.749
世界的に話題になっている（環境問題など）問題について、準備をしないで4～5人で議論できる。	0.316	2.20	0.706
日本と自国の文化的な違いについて例を述べ、それについてクラスメートにメモを見て3分程度で発表できる。	0.283	2.84	0.782
自分の生まれた町について地理や人口、町の特徴についてメモを見て3分ぐらい話すことができる。	0.270	2.89	0.747
自分の国にある観光地を、準備すれば5分ぐらい紹介できる。	0.265	3.12	0.755
原稿を用意せず、要点をまとめたレジュメだけを使って発表ができる。	0.261	2.35	0.744
日本の学校制度や文化について、準備した簡単なメモを見ながら5分ぐらい発表できる。	0.258	2.59	0.765
原稿を見ながら自分の家族などの身近な話題について3分ぐらいの発表ができる。	0.255	3.25	0.757
自分の国の社会制度（教育制度、政治制度）について、準備をしなくても説明できる。	0.144	1.97	0.677

表4 「話す活動の形態」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
自分の国の若者が抱える社会問題について、準備すれば原因や背景、解決策を3分程度で話すことができる。	0.508	2.62	0.836
世界的に話題になっている問題（人口問題や環境問題など）について、準備をすれば4～5人で議論できる。	0.479	2.77	0.820
日本の学校制度や文化について、準備をすれば4～5人で議論ができる。	0.463	2.74	0.785
自分の国でよく話題になる社会問題について、4～5人の前で説明できる。	0.454	2.48	0.803
日常的な専門的ではない内容について、15分ぐらい議論ができる。	0.431	2.57	0.769

日本語力をより反映するCan-do-statement項目の検討

Can-do statement	相関係数	平均	SD
ゼミで他人の発表内容について議論ができる。	0.381	2.53	0.771
話している時、相手が分からなそうにしていたらもう一度説明できる。	0.377	2.93	0.715
自分の専門の内容について、専門外の人にも分かるように説明できる。	0.356	2.60	0.714
絵や写真を見せながら、自分の国の生活に欠かせないものについてそれを知らない人にその事物がどんなものかその用途と機能を（3分程度）で紹介できる。	0.353	2.81	0.751
日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、準備をしないで4～5人で議論ができる。	0.353	1.99	0.655
日本の社会問題（少子化、高齢化など）について、自国と比較しながら4～5人の前で説明できる。	0.347	2.36	0.782
発表の時に、レジюмеと発表用のメモを見ながら話せる。	0.344	2.80	0.749
ゼミで発表ができる。	0.322	2.16	0.855
世界的に話題になっている（環境問題など）問題について、準備をしないで4～5人で議論できる。	0.316	2.20	0.706
箇条書きのレジюмеを使って説明するときに、どこを見るように指示しながら話せる。	0.315	2.60	0.754
自分が好きなスポーツやゲーム、場所などについて、お勧めするポイントを4～5人の前で説明できる。	0.303	2.94	0.771
日本と自国の文化的な違いについて例を述べ、それについてクラスメートにメモを見て3分程度で発表できる。	0.283	2.84	0.782
グラフや図を使ってフォーマルな発表ができる。	0.275	2.11	0.809
自分の生まれた町について地理や人口、町の特徴についてメモを見て3分ぐらい話すことができる。	0.270	2.89	0.747
自分の国にある観光地を、準備すれば5分ぐらい紹介できる。	0.265	3.12	0.755
原稿を用意せず、要点をまとめたレジюмеだけを使って発表ができる。	0.261	2.35	0.744
日本の学校制度や文化について、準備した簡単なメモを見ながら5分ぐらい発表できる。	0.258	2.59	0.765
原稿を見ながら自分の家族などの身近な話題について3分ぐらいの発表ができる。	0.255	3.25	0.757
自分の専門の内容について、専門外の人4～5人の前で説明できる。	0.159	2.63	0.734
フォーマルな日本語で、先生にあなたの友人の紹介（学年、専門、あなたとの関係など）がきちんとできる。	0.159	2.67	0.839
自分の国の社会制度（教育制度、政治制度）について、準備をしなくても説明できる。	0.144	1.97	0.677
専門のゼミで発表を始めると終わる時に、日本語で何と言うか分かる。	0.124	2.42	0.932
他人の発表に悪いコメントをする時、相手の気分を悪くしない言い方ができる。	0.116	2.39	0.772
フォーマルな議論の場で質問に答えるときに、始めと終わりに何というかわかる。	0.064	2.46	0.820

表5 「話す際に用いる道具等」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
絵や写真やジェスチャーを使って、日常生活について話せる。	0.400	3.02	0.744
絵や写真を見せながら、自分の国の生活に欠かせないものについてそれを知らない人にその事物がどんなものかその用途と機能を（3分程度）で紹介できる。	0.353	2.81	0.751
発表の時に、レジュメと発表用のメモを見ながら話せる。	0.344	2.80	0.749
箇条書きのレジュメを使って説明するときに、どこを見るように指示しながら話せる。	0.315	2.60	0.754
グラフや図を説明するときの表現が分かる。	0.293	2.49	0.886
日本と自国の文化的な違いについて例を述べ、それについてクラスメートにメモを見て3分程度で発表できる。	0.283	2.84	0.782
グラフや図を使ってフォーマルな発表ができる。	0.275	2.11	0.809
自分の生まれた町について地理や人口、町の特徴についてメモを見て3分ぐらい話すことができる。	0.270	2.89	0.747
原稿を用意せず、要点をまとめたレジュメだけを使って発表ができる。	0.261	2.35	0.744
日本の学校制度や文化について、準備した簡単なメモを見ながら5分ぐらい発表できる。	0.258	2.59	0.765
原稿を見ながら自分の家族などの身近な話題について3分ぐらいの発表ができる。	0.255	3.25	0.757
自分の専門の発表のために、要点をまとめたレジュメが書ける。	0.249	2.50	0.833

表6 「聞き手への配慮」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
話している時、相手が分からなそうにしていたらもう一度説明できる。	0.377	2.93	0.715
質問をする時、相手に負担にならないように具体的な質問ができる。	0.327	2.61	0.637
説明や質問の時、相手に分かりやすい言い方を選びながら話せる。	0.263	2.82	0.687
話している時、相手が分からなそうにしていたら、易しく説明したり言葉を言い換えたりできる。	0.231	3.02	0.743
話している時、相手が理解しているかどうか見る余裕がある。	0.214	3.07	0.715

表7 「社会言語的能力」から見た結果

Can-do statement	相関係数	平均	SD
先生と話す時、「です・ます」と普通体を間違えないで話せる。	0.361	3.17	0.762
先生のオフィスに電話をしたが、先生は会議中だった。電話に出た他の先生にフォーマルな日本語で用件を伝え、伝言を残すことができる。	0.287	2.65	0.756
フォーマルな日本語で、先生にあなたの友人の紹介（学年、専門、あなたとの関係など）がきちんとできる。	0.159	2.67	0.839
他人の発表に悪いコメントをする時、相手の気分を悪くしない言い方ができる。	0.116	2.39	0.772
専門の先生と話している時、敬語が使える。	0.106	2.43	0.751
フォーマルな議論の場で質問に答えるときに、始めと終わりに何というかわかる。	0.064	2.46	0.820